

## 『ギリシア文化の遺産』

栗原麻子、小林 功、桑山由文

本論文集は藤縄謙三氏の京都大学退官を記念し、一九九三年春に刊行された。氏を含む六人の研究者の、一九八八年以来幾度にもわたる研究会の成果である。執筆者の専門を反映して、藤縄氏の専門である古代ギリシア史をはじめとしヘレニズム史・ローマ史・ビザンツ史と内容も多岐にわたっている。

成立の事情は以上のとおりであるが、本書の論文集としての性格は退官記念であるということにとどまらない。専門を異とする研究者が統一的なテーマのもと共同研究をおこない、それを一書にまとめたことに本書の特長があるといえよう。『ギリシア文化の遺産』という題名が示すとおり、本書は古代ギリシア文化が、ローマ、ビザンツ、そして近代ヨーロッパをへて我々に継承されてきたことに注目し、それぞれの社会におけるギリシア文化の意義を問うたものである。このように広いパースペクティヴをもつ本書を一個人が書評することは難しいと思われるので、比較的専門の近いとおもわれる個別論文について三人が個々に評し、最後に本書全体についての見解を表明する、という形をとることとした。まず個別論文についてとりあげていこう。

まず序章では藤縄氏によって本書全体の構成が説明されている。

ギリシアの風土は今も昔も変わらないにもかかわらず、その地はアジアとヨーロッパの接点にあって変化の激しい歴史を経験した。古典ギリシア時代とビザンツ帝国時代の異質性に示されるようなギリシア民族の連続性と断絶の問題に、古典ギリシア文化の受容・継承の問題からアプローチするのが本書の目的である、とする。

周知のごとくギリシア文化は、民族をこえて普遍化し今日にいたっているのであって、文化の問題と民族の連続性・断絶の問題は、一見別の問題であるかのように感じられる。しかしこの両者が有機的に関連していることは、最終章において明かされるであらう。

続く第一章「世界の青年期としての古代ギリシア——古典的教養の源泉——」では同じ藤縄氏により、まず古代ギリシア社会における古代ギリシア文化が論じられる。氏によれば、ヘーゲルやヴィンケルマン、ヘルダーといった近代西欧の教養人によって指摘されたギリシア文化の「若さ」は、実はその文化が生まれた古代ギリシア社会の構造と密接に関連している。青年的文化を生み出した当のギリシアにおいて現実の青年の社会的地位は必ずしも高くはなく、精神や道徳の面ではきびしく批判されるのが常であった。これは社会制度と呼応しており、青年達は思慮を欠くとして三〇歳を越えるまで責任ある地位につくことをゆるぎされず、また結婚年齢も遅かったのである。この「閑暇」にはめぐまれた長い青年期が、いわば一〇年間の教養課程として「青年的文化」を成立させた。しかしこのギリシア社会と結びついた土着文化としてのギリシア文化は、やがてマケドニア・ローマの政策的意図とそれ自体の価値によって普遍化し、固有の生活と切り放された文

化財に変質していく、とする。

ただし古代ギリシア人の政治行動にみられる名譽心や愛國心といった青年期的兆候を、長い青年期の「習性」とする説明にはそれだけでは素直に納得しがたいものがあり、またさらに欲をいえば、なぜそもそも若者に教養が求められたのか、という点についても知りたく思った。

次に大戸千之「ギリシア文化とヘレニズム文化」では、ヘレニズムが東西の「融合」であるかギリシア文化の普及であるかという世界史上の問題を追求するにあたっては文化を受容したオリエントの人々自身による価値判断と必要性が問われなくてはならない、とする基本的な姿勢が表明される。そのためのケース・スタディの対象として、本書では前一世紀のコンマゲネ王国をとりあげ、トルコ南部に位置するネムルート・ダー山上の、王安ティオコス一世の巨大な陵墓を分析する。その碑文からは、彼がペルシア人とギリシア人と双方の頂点をなす王家の血筋を強調し、そのふたつの伝統が合わさったところをみづからの立脚点としてそこに權威の裏付けを求めていたことが明らかにされるのである。

この折衷的・融合的な性格は、ネムルート・ダーの神像や祭儀のおこなわれたかたにもみることがができる。祭司が父祖の慣習としてペルシア風の衣服を着用する一方で、参詣者については「この国の者であれ外つ國の人であれ」と記されており、この点にこの祭儀が外に向けても開かれていたことをみることがができる。著者はこのような融合が発想された理由を、融和的方策によるシンクレティズムと政治的理由とみなし、さらにはローマの覇権の伸長によってギリシア文化の普遍性が改めて感じられた可能性を指摘し

ている。とはいえこのような政治的計算による文化的融合にあって、彼らが自らのアイデンティティをいかに保ちえたかということとはまた別の問題であろう。なお著者の主張については、同氏による『ヘレニズムとオリエント——歴史のなかの文化変容——』（ミネルヴァ書房、一九九三年五月）を併せて参照されたい。

（栗原麻子）

第三、四章はローマ時代のギリシア文化を扱う。第三章は南川高志「ローマ帝國とギリシア文化」である。ローマ帝政期のギリシア文化は古典期の文化の再現ではない。ギリシア世界の置かれていた政治状況が異なるからである。これらの要素を考慮しつつローマ時代のギリシア世界で華開いた文化の性格を、「ギリシア・ルネサンス」の時代を中心に考察したのが本章である。まず、歴代諸皇帝の中でも特に「ギリシア好み」として有名なハドリアヌス帝の、ギリシアに対する援助や施策を著者は検討し、彼、ひいてはアウグストゥス以来の歴代皇帝の施策の第一の目的は、古典期の繁栄にふさわしい栄光をギリシア世界に回復させることであつたと指摘する。次いで、第二次ソフィスト運動の担い手たちについて、彼らの文化の性格も黄金期のギリシア文化の「形式」「外観」の回復であり、ハドリアヌス帝の施策と合致することを明らかにする。さらに、当時のギリシア都市の置かれた政治状況へ著者は考察をすすめる。彼らソフィストたちが文化、政治両面で活躍したギリシア都市が、ローマ帝國の支配下という、古典期とは全く異なる状況にあり、そこでは「ポリスの構造」が消滅していったことをD・ネルに拠りつつ指摘する。このような状況下でギリシア文化は擬古主義的で、独自の政治性をもたないものとな

らざるをえなかったが、それ故に、この文化は特殊古代ギリシアの性格を離れ、普遍性を獲得、純粋な教養文化に決定的に変質することとなったと著者は結論する。

本章ではギリシア・ルネサンスを政治的背景から考察することによって、その特色を浮かび上がらせている。否定的にとらえられやすいこの時代の文化の積極的側面を指摘していることも意義が大きい。あえて本章につけ加えるならば、それはギリシア文化の担い手についてである。もちろんギリシア世界が本書におけるテーマである。しかし、ローマ人もギリシア文化を摂取し、ほとんど第二の文化としていた。紀元後二世紀以前からローマにおけるギリシア文化の普遍化は進んでいた。ローマ人が受容し変質させたこのギリシア文化の流れは本章の扱う時期にどうなっていたのか。この点は本章には蛇足かもしれないが、評者は、より詳しく知りたかった。

第四章の米田利浩「古代末期のギリシア文化」においては、ローマ帝国が東西に分裂した時期以降が扱われる。それまでは古典的教養が元老院貴族層を結びつける絆であり、他から自分たちを区別する判断基準であった。それは彼らの間で一種の普遍性を獲得し、帝国全域にわたる等質な文化環境を形成していた。しかし、帝国の分裂という政治的動きと連動して、この文化環境は崩壊し、ラテン的西方とギリシア的東方という異なった歴史環境に分かれていったのである。このことは、歴史意識においても表れると著者は指摘する。すなわち、四一〇年の西ゴート族によるローマ政略に対する東西の反応の違いなどである。そういった状況に際して東方の歴史家たちは、西方に対する自らの世界の優位を説いた

のである。彼らは異教徒、キリスト教徒を問わず、この時代のローマ世界をおそった災禍から、「東方世界」としての自覚を強めていった。もちろん、キリスト教と異教との対立はあったが、彼らは等しくギリシア文化の後継者としての意識を強めていたのである。彼らはバイデリア（文化的伝統）を共有していたのである。こうして、五世紀に東方では、古代ローマ世界にかわって、コンスタンティノープルを中心とした新世界「ビザンツ世界」という観念が形成されていく。

本章ではローマ世界全体を見渡した上で、その中でギリシア世界が新たな自覚を持つていくことが指摘される。異教とキリスト教との対立に目を奪われがちなこの時代を、このような宗教的対立から離れて、歴史意識というより深い視点から考察し、ビザンツ世界の確立をそこから読みとるまでに発展させている。もとより当時の人々の歴史意識が、ギリシア文化受容に直結するのかわりかとは疑問に感じなくもない。また、彼らが後継者たらんとしたギリシア文化の詳細にも言及してほしかった。しかし、そこに描かれる社会情勢の変化と歴史意識の密接な関わりには説得力がある。

以上のように、第三章と第四章がローマ時代を扱うのであるが、この二章をまとめてみた場合、そのテーマの一致は少ないように見受けられる。といっても、両論文が矛盾しているというわけではない。確かに、両者とも、ローマ世界においてギリシア文化が普遍的な文化となっていくという共通の認識に基づいて論議を進めている。しかし、前者はギリシア世界に絞られたギリシア文化を扱う。一方、後者はローマ世界全体の中での漢としたギリシア

文化の動向を扱う。それ故、個々の論文は建設的な論議であるにもかかわらず、論文集としてみた場合には、ローマ時代の大神ととしてのギリシア文化がわかりにくいという印象を受けるのである。

(桑山由文)

第五章から第七章においては、ビザンツ帝国時代のギリシア文化の状況について論じられている。第五章の井上浩一「ビザンツ帝国における古典文化の復興——フォティオス『文庫』を中心に——」は、九世紀中葉のコンスタンティノール総主教フォティオスの著作である『文庫』をとりあげ、ビザンツ帝国における古典文化の復興について論じたものである。井上氏は『文庫』の二八〇に及ぶ項目の中から、ヘロドトス『歴史』、ヨセフス『ユダヤ古代史』、そしてプロコピオス『戦史』を取り上げてフォティオスの古典収集、及びその要約の特徴を考察し、さらには当時の古典の復興の状況についても検討を加えた。その結果フォティオスの時代は文献収集と写本の整理等から、本格的な古典研究へと移っていく時期であったと論じている。また、筆者は続けてフォティオス以降、一〇世紀の「マケドニア朝ルネサンス」が最高潮に達した時期まで概観を行っている。

本論文は着実な史料読解に基づいて、九世紀中葉のビザンツ帝国の文化的状況を明らかにしようとしており、九世紀を研究の対象としている評者も大いに啓発された。しかし後で詳しく述べるように、ビザンツ帝国の国家理念であるキリスト教と、古典文化の復興とがどのような関係をもっていたのかについて、氏なりの展望を披露していただきたかった。

第六章は根津由喜夫「十二世紀ビザンツ宮廷の政治文化——ラ

テン文化とヘレニズム趣味——」である。十二世紀には十字軍に代表される西欧勢力の東地中海への進出が進み、それに対して十一世紀後半の混乱を收拾したビザンツ帝国は、コムネノス朝の諸皇帝の下、国家の立て直しを図っていた。この時代、ビザンツ帝国の支配層の人々の中には、西欧に対して異なった二つの対応——親ラテン的傾向と反ラテン・親ギリシア的傾向——が生まれていたという。しかしながらこの二つの潮流は相互補完的な関係を持っており、政策でもあった。そしてこの時期のビザンツ帝国には他にとるべき道はなかったと氏は論じている。

本論文は論題にもある通り、コムネノス朝期の政治文化の問題を扱っており、複雑な情勢に直面していた一二世紀のビザンツ支配層の政治的・文化的状況を生き生きと論じた力作である。また、ラテン文化とギリシア文化の関係という視点から論を進めたため、論文の視角に多様性が現れていることにも好感を感じた。しかし欲をいうならば、本書全体の主題がギリシア文化の展開と継承にある以上、なにゆえ政治史に大きく傾斜した視角から論を展開したのかという点について、もう少し明解な説明が欲しかった。

第七章、井上浩一氏のもう一本の論考「ビザンツ帝国の滅亡とギリシア文化のゆくえ」は、国家の保護の下行われていた古典研究が、ビザンツ帝国の滅亡後いかにして生き延びていったかを論じている。その際、氏はクリトブローロスとベッサリオンという二人の人物を取り上げ、ビザンツ帝国滅亡後のギリシア文化の展開を説明する。クリトブローロスはトルコの支配を受け入れ、トルコをビザンツ帝国の後継者と位置づけた。しかしこのような考えが結実することは結局なかった。それに対してベッサリオンは、イ

タリアに亡命して精力的に古典の写本を収集、筆写した。彼のコレクションは西欧へのギリシア文化の伝達・移植に計りしれない意義をもったのである。

本論文はクリトブローロスとベッサリオンの行動の丹念な分析によって、ビザンツ帝国から西欧へという古典研究の流れが明解に述べられた論文である。ただ、徴力を省みずにあえて一つ疑問を記すことにしたい。それは第五章とも関係することであるが、古典文化とギリシア正教との関係である。氏によると古典文化は、「ビザンツ文化の薄い表層」であり、一方通俗文化はギリシア正教と結びつき、両者は「かろうじて共存していた」。古典文化が支配層の文化であり、社会に基盤をもっていなかったことは否定しない。しかし先述したようにキリスト教はビザンツ帝国の国家理念でもあり、支配層や知識人も密接に結びついていた。ベッサリオンやフォティオスが同時に聖職者であったことを忘れるべきではない。キリスト教と古典文化を対置させるだけでなく、双方が支配層や知識人の間でどのように融合していたかにも一層の注意を向けていただきたいかった。

(小林 功)

つづく第八章では藤縄謙三氏により「近代におけるギリシア文化の復興」が語られる。日本におけるギリシア文化の受容が西洋近代を經由したものであったことを考えれば、本章がきわめて現代的な問題を扱っていることはあきらかである。その一方で、西洋近代における新古典主義運動が直接近代ギリシア建國に結びついたことを考えれば、西洋におけるギリシア文化受容は、ギリシア民族の一貫性の問題としてもとらえることができる。氏によれば、西洋におけるギリシア文化の復興は一四世紀イタリアではじ

まるが、それが真に注目をあつめるのは新古典主義の時代である。造形美術の面でのギリシア復興運動が、やがて留学ギリシア人の活動と相まってギリシアにたいする同情を生み、古代美術の崇拜者であるバイエルン国王ルートヴィヒの「純粋に文化的な野心」にもとづく近代ギリシア独立運動を招くにいたるのである。

しかし新古典主義は、たとえば新古典主義様式の建築がギリシアの地に建ちならぶことにより一般ギリシア人の精神を古典ギリシアと結び付けるのに寄与したが、神殿の彩色一つをとってみても普及した古典ギリシア像と現実との乖離はなほだしく、その結果西洋におけるギリシア研究は、現実のギリシアを理解するか、遺物や古典に頼るかの選択の問題に直面することになる。ヒューマニズムの源泉としてギリシア文化は永遠の価値をもつものときれる一方で、そのギリシア文化は実は「生活に密接に結び付いており」再現しがたいことが認識されるようになる。

やがて現代にいたり、古典語教育が衰退・縮小するなかで、われわれにとってギリシアはいかなる価値をもちうるのか。藤縄氏は現代の研究者がとるべき立場には、近代人との根本的な差異を強調する立場と、ギリシア文化の普遍性を強調する立場の二つがあるとして、研究の高度な細分化が、後者の、いわばギリシア文化を「教養」として研究する立場にあたる影響を憂慮するのである。これはこれから研究をはじめようとするわれわれに与えられた課題でもあるだろう。また近代ギリシア人が受容して自らのアイデンティティをそこにもとめたギリシア文化が、いったん西洋近代を經由し普遍化された文化であったことが驚きをあたえる。いったん民族と切り離されて普遍化したギリシア文化は、近代に

至って接ぎ木され再びギリシア人の民族意識を支えたのである。かくして本書を通観することにより、古代ギリシアの地において普遍化したギリシア文化がヘレニズム時代をへてローマ帝国において普遍化し、やがてその後裔であるビザンツ人によって継受される一方でかたや西欧を経由して近代ギリシア建国の精神的バックボーンともなるにいたる過程を、読者は一望することになるのである。ときおり感じられる執筆者間のニュアンスの違いも、本書がそれぞれ独立した研究者による論文集である以上むしろ当然のことであるだろう。

しかし本書をもってギリシア文化の継受の諸相があたりつくされたわけではもちろんない。第一に、この書は第一章をのぞけば、普遍化され土着性を失ったギリシア文化を考察対象としている。しかし本書が、ビザンツ帝国をへて近代ギリシアへといたる、民族と不可分のものとしてのギリシア文化継受を追うものでもある以上、そのような高度な文化だけではなく、近代ギリシアへと連綿と受け継がれてきただろう土着的なギリシア文化についても、言及する必要があっただろう。とくに、ビザンツ帝国における民

衆レヴェルでのギリシア文化の継受の様態、あるいは有無について知ることができるならば、第八章で描かれる、ギリシア文化による近代ギリシア建国の叙述もより現実味を帯びるように思われるのである。

つぎに、本書においてほとんど前提とされているギリシア文化の優越性は、いつの時代にも共感されうるものであったのだろうか。とくに、近代の日本人が古典的な教養としてのギリシア文化へ関心を抱く機縁となった西欧近代文明の価値は、今日すでに不動のものではない。価値の多様化の時代に生きるわれわれにとつて、ギリシア文化はいかなる意義を有しているのか。この容易に解決できない難問を投げかけて、本書は終わるのである。

(栗原麻子)

(A5判 二六〇頁 一九九三年三月 南窓社 四五〇〇円)

(栗原麻子 京都大学大学院博士後期課程)

(小林 功 京都大学大学院博士後期課程)

(桑山由文 京都大学大学院修士課程)